学会長挨拶

大樹にはしっかりした芯がある

吉田正生

「桃栗三年　柿八年」という言葉がある。芽生えの時から、桃と栗は三年、柿は八年経てば実を結ぶ、という意味であることは誰もが知っている。

この学会は「旭川実践教育学会」の時から数えたら 20 年以上経つ。初代会長の本間謙二先生が土を耕し（つまり、周りのいろいろな人や関係機関に働きかけて）、種を蒔いた。私は特にお手伝いをするわけでもなく、ただ傍らでそれを見ていたが、そのとき思ったのは、（専門の哲学とは関係ないのによくやるな。本間先生のこの情熱はいったいどこから出てくるのだろう）ということだった。

本間先生をはじめ役員の方たちの熱心な働きかけのゆえだろう。附属小・中学校の先生方の積極的な参加もあった。学会では、さすがだなと思わされるような発表をなさっていた。数年後には、本州から著名な方をお招きし、ホテルの宴会場を借りて大々的な講演会も行った。その後のレセプションの賑わいは、今も心に残っている。市内の小・中学校の校長先生も何人か出席してくださっていた。東京から見れば、北辺の一角の出来事かもしれないが、冬の寒さをものともしない旭川の先生方の教育への熱い思い、創意を強く感じさせられた。（東京ばかりが情報の発信地であってはいけない。旭川からも発信しなくてはいけないし、できる先生たちがいるじゃないか）という思いを強くした。

2019 年 11 月、新会長として 10 年ぶりに参加した学会は、その頃と比べると火の消えたように淋しかった。それでも（歴代の会長、事務局担当の方をはじめとした役員の先生方の努力によって、「旭川実践教育学会」という木は立ち枯れることなく維持されてきた。のみならず、さらに発展させようとご努力されているのだ）ということを強く思わされた。10 年前に埼玉県にある大学に移り、のほほんと過ごしていた自分と比べたとき、頭の下がる思いがした。何しろ、全国学会にするために名称も「旭川実践教育学会」改め「日本学校実践教育学会」とする、組織の在り方の見直しもしているというのであるから、この学会を「大樹」にしようとしているのだな、と思ったのである。

こうした流れの中で何もしていない自分が会長に就任するということについて、忸怩たるものがあった。だが「大樹」になるお手伝いができればと思い、あえてお受けした。だが、私は人間的な魅力も実力も不十分である。この学会を「大樹」にするためには芯が必要である。全国学会を目指していても、芯は旭川キャンパスの先生方であり、附属校・園の先生方であろう。この学会がしっかりした芯を持ち巨樹となり、葉を茂らせ花を咲かせれば――つまり学会誌によい研究論文、実践研究がどんどん載るようになったり、研究大会で魅力的な

発表が聞けるようになれば――、多くの会員がかつてのように集まってくるであろう。
　まずは、芯が今以上に大きくなることを祈って、筆を擱く。